

# 何香凝の芸術活動——1930年代における美術を通じた抗日救国運動を中心に

竹内理樺

## はじめに

中国では2011年は、初めての共和国国家・中華民国が誕生する契機となった1911年の辛亥革命から数えて100周年にあたり、国内外でさまざまなシンポジウムやイベントが開催された。その一環として、北京の中国美術館では2011年9月16日から26日まで、「辛亥革命100周年記念—何香凝芸術精品展」が開催された。何香凝は、孫文が日本亡命中に東京で創設した中国国民党の前身、中国同盟会に設立当初から参加し、夫の廖仲愷と共に孫文の革命活動を支えた中国の「革命老人」の一人である。1940年代後半には民主諸党派の一つである中国国民党革命委員会を創設し、中国共産党（以下、共産党と略称）との協力のもと、民主諸党派人士として中華人民共和国政府に参加した女性政治家であった。また彼女は、1900年代初頭の日本留学中に東京の女子美術学校で正規の美術教育を受け、現在は中国広東省深圳市に彼女の名を冠した美術館があるほどの著名な画家でもある。しかしその芸術活動については、近年ようやく本格的な研究が始まったばかりで、政治面における功績ほど注目されてきたとは言い難い。

何香凝に関する研究は日本では決して多くはないが<sup>1</sup>、中国では彼女の著作や演説、信書などを集めた文集、『双清文集』下巻<sup>2</sup>が出版されているほか、伝記も多数出版されている<sup>3</sup>。また、彼女の女性運動における功績や、国民党左派、あるいは民主諸党派の指導者としての足跡を考察する論述も多く見られる。一方、彼女の画家としての側面は、日本では、彼女の母校である女子美術大学の創立110周年を記念して出版された論文集の中に収められた、

何香凝美術館研究員の王曉松による「何香凝の芸術家人生」<sup>4</sup>で紹介されているが、管見によればこれが唯一の論考である。中国においても、2000年頃からようやく何香凝の芸術活動に関するいくつかの論文が発表されはじめ、2004年には画家という視点から何香凝を紹介する初めての単著、雲雪梅著『何香凝』が出版された<sup>5</sup>。その後、何香凝美術館が設立十周年にあたる2007年に発行した『何香凝美術館年鑑2003 - 2006』（任克雷主編）に数本の論文が掲載され、翌2008年7月には何香凝の生誕130周年を記念して二日間にわたる国際シンポジウムが開催される<sup>6</sup>など、何香凝美術館を中心に、何香凝の芸術面に関する活発な議論と研究が行われるようになった。近年では、苗朋朋「何香凝絵画芸術及其社会性研究」（上海大学修士論文、2008年）や陳姍「何香凝絵画芸術研究」（南京師範大学博士論文、2009年）など、美術学の研究分野で何香凝を研究する学位論文も発表されている。特に陳姍の研究は、何香凝の日本留学とヨーロッパ渡航、絵画を通じた交流と社会活動、そして彼女の絵画が内包する思想や精神の3つの観点から何香凝の絵画と芸術活動の内実に取り、美術史の中に位置づけようとする意欲的な研究である。また、「女性絵画」の視点から分析を加えているのも新たな取り組みであると言える。これらの研究に共通しているのは、何香凝の芸術活動を政治活動と密接に結びつけ、彼女の絵画に本人の意図したもの以上の、あるいはやや異なる政治性が付与されていることである。たとえば1997年に出版された『中国書画名家精品大典』の何香凝の項には、「何香凝の絵画芸術は終始彼女の政治的生涯と結びついており、彼女の絵画活動と革命活動は緊密に関連し、相互に照り輝いている。」と記されている<sup>7</sup>。

陳姍論文を含め多くの研究では、何香凝の芸術活動は早期・中期・晩期の3つの時期に分類される。日本画から中国画への移行期を早期と中期のいずれに分類するかはそれぞれ見解が異なるが、いずれの研究でも、早期は日本画の画風を持つ日本留学期を中心とし、中期以降は中国画の画風に転じた時期とされ、中華人民共和国の建国前後をもって中期と晩期の境とする点ではおおむね意見が一致している。また、早期の画題としては獅子と虎が特に注目され、中期では梅や菊の画題が取り上げられ、それが当時の彼女の革命活動や政治活動を反映するものと評される。具体的には、獅子と虎は日本留学

時の彼女の革命に対する気概を反映するものとされ、たとえば周恩来夫人の鄧穎超は、「何香凝の獅子と虎の絵に寄せる感情は、陳天華の小説と同工異曲の趣があり、中国の各民族人民に眠れる獅子のごとく覚醒し、猛虎のごとく勇壮であるべきことを示した。」としている<sup>8</sup>。一方梅と菊の絵には、孫文と夫廖仲愷の遺志を継承し国民革命や抗日救国運動に尽力した彼女の決然とした意志が、冬の厳しい環境の中で咲く姿に表現されていると評される。しかし、これらは建国後の晩期も含め、彼女が生涯を通じて好んで描いた画題であり、日本留学時代には獅子と虎だけでなく、馬や鹿、猿などさまざまな動物画を描き、そればかりでなく、山水画や花卉画も描いていた。もちろん彼女自身にも、みずからの絵画に思想や主張を反映させる意図があったことは十分推察されるが、これらの画題にはそれ以上の政治性が付与されて過度に強調され、何香凝の芸術活動に対する評価全体にも影響を与えている。たとえばかつて廖仲愷・何香凝夫妻の伝記を執筆した周興梁は、「何香凝が獅子や虎の絵を好んで描いたのは、中華民族の振興と世界の民族の中にある国魂（国民としての精神）に呼びかけたものであり、近代の中華民族の民主革命において、恐れを知らぬ大いなる精神を謳歌するものである」とする。同時に彼女の描いた菊の絵については、「彼女は菊の花の寒風を恐れず、雪や霜に屈しない革命的な気概と戦闘的な品格を尊重し愛した」とし、何香凝が菊を描いたのは「民主革命に携わる者の、恐れずに闘い勇気を持って勝利を得んとする時代的精神を謳歌するためであった」と評する<sup>9</sup>。さらに、何香凝の政治活動を重視するあまり、「何香凝の芸術の目的は鮮明であり、彼女の心の中では国家と民族の利益が第一であり、芸術はその次であった」と評する論考さえある<sup>10</sup>。しかし、何香凝には孫文と夫廖仲愷の死後、中国国民党（以下、国民党と略称）の職を辞して国民党中央と一線を画し、政治から離れていた時期がある。この時期、何香凝は一人の画家として、一国民として活動し、画家の立場を通じて社会との関わりを持っていた。本稿では、何香凝の芸術活動の変遷を考察し、特に1930年代に何香凝が画家であることを立脚点として抗日救国活動を行っていたことを明らかにし、彼女の芸術活動とそれに与えられてきたこれまでの評価に検討を加えたい。

## 1. 絵画との出会い

何香凝は1878年6月27日、香港で生まれた。父親は広東省の農民出身であったが事業に成功し、彼女が生まれた頃にはかなりの資産家となっていた。當時の上流家庭の慣例として女性は幼い頃から纏足をほどこされたが、何香凝はそれに強く抵抗した。纏足は女性がよりよい結婚をするための一つの条件であったため、両親は彼女の結婚問題を懸念していたが、両親亡きあと叔父を頼って帰国していたアメリカ華僑の廖仲愷が、客家出身の父の遺言に従い、纏足をしていない女性との結婚を望んでいることを知った<sup>11</sup>。こうして「天足（纏足をしたことのない自然のままの足）」が縁となり、何香凝は1897年に廖仲愷と結婚した。この結婚は「父母の命、媒酌の言」と呼ばれる旧式の婚姻形態に基づくものではあったが、夫婦は清朝政府の外交官であった廖仲愷の兄の家に同居して仲睦まじく新生活を始め、屋上の物干し台にあった静かな小部屋を自室とし、その部屋を「双清楼」と名付けた。何香凝が後年みずからの号を「双清楼主」とし、詩画集を出版した際も『双清詩画集』と命名したのはこれに由来する<sup>12</sup>。廖仲愷は叔父の援助を受けながら香港官立の皇仁書院に通い、帰宅後は学んだばかりの西洋の学問を何香凝に教えた。また、詩や美術を好んだ彼は、しばしば近隣に住む画家の伍懿庄を訪れて絵画の手ほどきを受け、その知識を何香凝に伝授した<sup>13</sup>。伍懿庄は嶺南画派の祖と言われる居廉に師事した画家で、書画だけでなく詩作にもすぐれていた。高劍父、陳樹人ら後の嶺南画派の代表的人物たちとは同門であり、高劍父を経済的に支援したと言われる。何香凝は、父の方針で幼い頃に二年間の儒教的教育しか受けられなかったが、結婚後、廖仲愷を通じて学問や詩画を学び、視野を広げた。

日清戦争後、中国では教育制度の改革と共に、西洋文化を速修する目的で日本留学ブームがおこった。廖仲愷も日本留学を希望したが、兄が学費の負担を承諾しなかったため、何香凝が結婚時に持参した装身具を売って費用を工面し、二人は1903年に前後して日本に留学した。廖仲愷は日本語補習学校を経て早稲田大学経済予科に入学し、何香凝は日本女子大学の補習学校で日本語を学習した後、東京女子師範学校予科に入学した。半年後、彼らは留学

生の集会で日本亡命中であった孫文と出会い、革命活動に参加するようになる。何香凝らは当初学校の寄宿舎に別々に住んでいたが、孫文の要請で東京の牛込区に家を借り、そこで義勇軍を結成して秘かに軍事訓練を行った<sup>14</sup>。何香凝は翌年2月、香港の実家に戻り娘の廖夢醒を出産したが、娘を一時実家に預けて単身東京に戻り、再び革命活動に従事した。また、1905年に孫文が東京で中国同盟会を結成すると、革命資金調達のため香港に行っていた廖仲愷に先んじて同盟会に参加し、最初の女性会員の一人となった<sup>15</sup>。彼らの住居は同盟会の通信連絡と集会の場となり、孫文から秘密厳守のため日本女性の使用人を雇わないよう求められた何香凝は、家事全般から集会の接待、孫文宛の秘密の通信物の受け渡しなど、さまざまな任務にあたった。学業面では、1906年春に東京女子師範学校予科を修了すると、引き続き日本女子大学教育学部に入學したが、一年後に胃潰瘍のため一時休学し、一旦は復学するも再び体調不良と第二子妊娠のため、結局は退学に至った。1908年8月に息子の廖承志を出産した後は、革命活動と二人の子の育児、家事の傍ら、翌1909年春に女子美術学校（現在の女子美術大学）日本画撰科高等科に編入し、日本画を学んだ<sup>16</sup>。後年、息子の廖承志は、孫文が中国国内で武装蜂起をする際に軍旗や告示などのデザインをする人材を必要としており、そのため何香凝が美術学校に入ったと述べているが<sup>17</sup>、革命活動と家事・育児に追われながらも美術を学び、軍旗のデザインや縫製、刺繍までこなすことができたのは、やはり何香凝自身が元来絵画を好み、芸術的素質を持っていたからであろう。女子美術大学では端館紫川の指導を仰いだが、同時に田中頼璋にも師事した<sup>18</sup>。田中頼璋は四条円山派に属す日本画家で、主に山水画と風景画を得意とし、虎を描いた傑作でも知られている。何香凝は彼の家を週二回訪ね、虎や獅子の描き方を学んだ<sup>19</sup>。後に何香凝は回想録の中で、当時、日本の文化界は日中の文化交流を重視しており、彼女が中国人留学生でしかも女性であったことから、田中からたいへん熱心な指導を受けたと述べている<sup>20</sup>。なお、女子美術大学では、伝統的に教えられていた「つまみ絵」（細かく切った絹の布をピンセットで貼り付け、モザイク状に絵柄を作り上げるもの）も学び、菊を題材にした作品が残っているという<sup>21</sup>。1911年春に女子美術大学を卒業すると<sup>22</sup>、すでに大学を卒業して中国各地で革命活動を行っていた廖

仲愷と合流し、二人の子を連れて帰国した。同年秋には辛亥革命が起こり、翌1912年に中華民国が成立した。

前述のように、日本留学以降の何香凝の絵画は、獅子や虎だけでなく、鹿や馬、猿などその他の動物画や山水画、花卉画などさまざまな画題のものが残っている。しかし、その中で特に獅子と虎を描いたことがクローズアップされ、そこに「彼女自身の精神の依拠するもの」、すなわち「彼女の心の中の『国魂（国民としての精神）』」が表れていると評される<sup>23</sup>。これは、何香凝が1913年に描いた獅子の絵に、柳亜子が1929年に『国魂』と題をつけ、題詩に「国魂招得睡獅醒、絶技金閨妙铸型（国の魂が眠れる獅子の目を醒めさせ、絶妙な技を持つ金閨（婦人）が巧妙にその様子を描き出している）」と書いた<sup>24</sup>ことに由来するものと考えられる。すなわち、後に柳亜子によって与えられたこの画題と題詩が、何香凝の描く獅子の絵すべてに「覚醒しようとする獅子」のイメージを与え、それが強調されることになったのではないだろうか。廖承志は、父廖仲愷は何香凝の描いた『雄獅西顧図』を特に好み、中国同盟会の同志であった朱執信もその絵をしばしば高く評価したと述べている<sup>25</sup>。また、1910年に何香凝が『猛虎咆哮図』に「克強先生正」と題款して、中国同盟会の指導者であった黄興に贈ったのは有名なエピソードである<sup>26</sup>。動物画はもともと彼女が師、田中頼璋らから学んだ画題であった。また、清末・民国期の中国にはナショナリズムを高揚させるイメージの一つとして「中国＝眠れる獅子」<sup>27</sup>の言説があり、獅子や虎は知識人から勇猛果敢な姿勢を表象するシンボルとして好まれていた。そのため、廖仲愷をはじめとする革命の同志は彼女の描く獅子や虎の絵を特に好み、何香凝もこれらの画題をよく描いたのだと考えられる。さらに、柳亜子の画題と題詩により、彼女の獅子の絵は「眠れる獅子」を革命によって呼び覚まそうとする彼女らの精神と行動を反映するものと意味づけられ、当時の何香凝の絵画を代表する画題として評価されるようになったのではないだろうか。

## 2. 政治への参加

孫文らの革命活動は中華民国の成立という形で結実したが、民国政府の実権はまもなく袁世凱の手に渡った。1913年7月の第二革命失敗後、何香凝ら

一家は袁世凱の迫害から逃れるため、孫文と前後して再び日本に渡った。何香凝は夫と共に各地で宣伝や募金活動に携わり、1920年に孫文が広州に戻って広東軍政府を組織し、北京の北洋軍閥政府に対する護法運動を開始すると、孫文夫人の宋慶齡と共に兵士の慰問などの後方支援活動を行い、孫文と夫の活動を支持した。しかし、彼女が本格的に政治に参加するようになったのは、孫文が国民党の改組と第一次国共合作の方針を打ち出した1924年以降のことである。同年1月に広州で開かれた国民党第一次全国代表大会(一全大会)で、孫文は三民主義に新しい解釈を加え、「連ソ・容共・扶助農工」の方針をもって国民革命の綱領とすることを宣言した。何香凝はこの一全大会に三人の女性代表の一人として参加し、「法律、経済、教育、社会における男女平等」の原則を提議した。また、大会後まもなく国民党中央執行委員会に婦女部が設立されると、国民党・共産党双方の女性黨員と共に女性運動を推進し、婦女部長が相次いで辞任した後は代理部長に就任して運動を指導し、女性の啓蒙と支援・救済に努めた。

その後、孫文は北京政府の要請に応じて北上したが、北京で病に倒れる。何香凝は宋慶齡を助けて孫文の看護にあたったが、孫文の病状は回復せず、1925年3月12日にその生涯を閉じた。孫文は亡くなる前日、すでに準備してあった「国事遺囑」、「家事遺囑」、「ソ連への遺囑」の3つの遺囑に署名し、何香凝、汪精衛、孫科、宋子文、戴季陶ら9名が証人として「国事遺囑」と「家事遺囑」に署名した。その後、孫文は改まって「廖仲愷夫人」と何香凝を呼び、宋慶齡の後事を託し、何香凝は孫文の国民党改組の精神を必ず擁護し、すべての主張を遵守すること、力を尽くして宋慶齡を守ることを誓った<sup>28</sup>。指導者を失った国民党は合議制を採用し、孫文の遺囑を履行して「中国の独立、平等、自由」の達成のため国民革命を貫徹させることを宣言して、集団指導体制を確立した。しかし、指導者の一人として財政部長に就任した廖仲愷が財政機関の統一に着手すると、肅正を恐れた軍や土着勢力など多方面の反発を招き、同年8月20日、廖仲愷は何香凝の目前で暗殺される。結局、暗殺者は不明のままに終わったが、その後党内の二人の指導者が失脚し、国民党の集団指導体制は崩壊に至った。廖仲愷が亡くなったことで、寡婦・廖仲愷夫人となった何香凝は夫の地位と思想を継承する立場となり、その政治的

地位は急速に重要性を増すようになる。何香凝は各地で開かれた夫の追悼式や国民党支部などで演説する機会が増え、同年10月の国民党広東省第一次代表大会で広東省党部執行委員に、翌年1月に開催された国民党第二次全国代表大会（二全大会）で第二期中央執行委員に選出され、同年8月には中央政治會議委員に就任した。

一方、何香凝は広州に戻った頃から政治活動の傍ら画作も続けており、日本留学中に学んだ日本画から、しだいに中国の伝統的な山水画・水墨画へと傾倒していった。当時、広東省の画壇では日本留学から戻った高剣父、高奇峰兄弟ら多くの画家が活躍していた。高剣父は嶺南大学卒業後、廖仲愷・何香凝夫妻とはほぼ同時期に弟の高奇峰と共に日本に留学し、中国同盟会にも参加していた。高剣父は日本留学中、京都画壇の竹内栖鳳の影響を受け、白馬会や太平洋画会に参加して洋画を学んだ。帰国後は日本の近代的な洋画との融合を図った中国画の変革運動、新国画運動を推進し、孫文の死後は政治から離れて1924年に広州で春睡画院を創設し、後進の育成に努めた。弟の高奇峰は日本で何香凝と同じく田中頼璋に師事し、広州に戻った後は広東工業学校で教鞭をとりながら洋画の理論を中国画に取り入れ、兄と共に新国画運動を進めた。この頃から彼らは居廉に師事した兄弟弟子の陳樹人とともに「二高一陳」と呼ばれ、嶺南画派と称される。一方、伝統的な中国画の維持を主張する保守派の潘致中、黄般若、姚粟若らは、1923年に癸亥合作画社を組織して新国画運動を批判し、1925年には規模を拡大して国画研究会と改称し、新国画派と激しい論戦を繰り広げた。保守派は中国画の改造に外部の力を借りる必要はないと高剣父らを批判し、その言動は高剣父の中傷や研究会の妨害などしだいに過激化した。しかし、清末から始まった西洋文化吸収の気運の中で新国画運動に賛同する青年画家は多く、高剣父はその後、春睡画院における後進の指導と作画に専念した。春睡画院は日中戦争中各地に移転して避難しながら1949年まで続き、現代中国画壇の中核となる優秀な画家を輩出し、新国画の普及に大きな役割を果たした<sup>29</sup>。何香凝は高剣父、高奇峰兄弟とは日本留学前から面識があり、一時は孫文のもとで共に政治活動を行い、広州に戻った後も変わらず交流があった。現在、何香凝も嶺南画派の一人として名前が挙げられることもあるが、その評価は定まったものではなく、彼



女が高剣父らの新国画運動に参加した形跡はない。廖承志は、広州に戻ってから1922年6月に陳炯明によるクーデターが起こるまでの時期、何香凝の画風は嶺南画派の影響で変化し、水墨画に傾倒し、日本画の資材は減多に顧みられることがなくなったとしているが、当時は高兄弟よりもむしろ姚粟若と比較的よく交流していたとも述べている<sup>30</sup>。いずれにせよ、中国画のあり方に関する議論が活発化する広州にあって、何香凝が日本留学で学んだ日本画からしだいに中国画に興味を移していったのは自然の成り行きであったと言えるだろう。

前述のように、孫文と廖仲愷の死後、何香凝の政治的役割は強まり、彼女自身も孫文と夫の遺志を継いで国民革命を遂行し、帝国主義と軍閥を打倒して中国の自由と平等を達成することをみずからの使命と任じ、目標としていた。しかし、国民党内は蒋介石を中心とする党中央や汪精衛ら国民党左派、西山会議派など、各派の対立が激化する局面に陥っていった。何香凝は左派の一員として武漢政府に参加し、1927年4月に蒋介石が四・一二クーデターを起こして共産党員を弾圧し、その後南京国民政府を樹立すると、抗議の声明を発表した<sup>31</sup>。また何香凝は、汪精衛、宋慶齡ら国民党左派や毛沢東ら共産党員と計40名で連名の声明を発表し、蒋介石の行動を糾弾し、南京国民政府と対立する意志を示した<sup>32</sup>。しかし、左派と共産党の間にも亀裂は生じており、同年7月、汪精衛は「分共（共産党との合作解消）」を提議し、何香凝、宋慶齡らの反対もむなしく、孫文が打ち出した国共合作の方針はついに挫折に至った。翌28年8月、何香凝は蒋介石の要請に応じて南京で開かれた国民党二期五中全会に出席した。しかし、この会議で党の中央集権化が図られ、党と軍における蒋介石への権力集中が強化されたことに失望し、政治会議委員、国民政府委員など委員職の辞表を提出したが慰留された<sup>33</sup>。同年11月、何香凝は改めて「〔党〕中央を正しく救うことができなかった我が身の責任を明らかにする」ため、国民党中央執行委員および国民政府における一切の職務を辞し、今後党中央とは行動を共にしないことを表明した<sup>34</sup>。そして翌1929年、夫の名を冠して1927年3月に広州で設立した「仲愷農工学校」の資金調達のため国外に出国すると表明し、政治の第一線から退くこととなった。

### 3. 美術を通じた抗日救国運動

孫文と廖仲愷の死後、蒋介石との確執が続く中で、何香凝は志を同じくする中国同盟会時代からの同志である画家の経亨頤や陳樹人、詩人の柳亜子らとの交流を深めていった。彼らは政治家であっただけでなく、詩文や書画などの文芸に親しむ文人であり、彼らの影響を受け、何香凝の画風はさらに中国の伝統的な文人画や山水画の流れを汲むものへと変化していった。画題も、古来文人の好んだ「歳寒三友」（冬の寒さに耐える松、竹、梅）や、知識人の気品と風格を示す「四君子」（蘭・竹・梅・菊）を描くことが多くなった。彼らは「寒之友社」を結成して絵画と詩の合作を行い、美術展を主催するなどの活動も行ったが、その活動は不定期で、特に規約もなく、ゆるやかな組織形態であった。1928年の夏には、何香凝は経亨頤の招きに応じ、教育家でもあった彼が私立春暉中学を設立した白馬湖畔に赴き、柳亜子や経亨頤、陳樹人、居若文（陳樹人の妻）らと詩を読み画作に興じている。

1929年6月、孫文の遺体を南京郊外の紫金山に完成した陵墓、中山陵に安置する式典がとり行われ、何香凝、経亨頤、陳樹人らも共に参列した。その際、彼らは『松竹梅図』を合作し、于右任がその絵に題詩をつけた。題詩には、「紫金山上中山墓、掃墓来時歳已寒。万物昭蘇雷啓蟄、画図留作後人看。松奇梅古竹潇洒、経酒陳詩廖哭声。潤色江山一枝筆、無聊来写此時情。（紫金山上の中山墓、墓参りに来る時には歳（年）はすでに寒し。万物は明らかに雷をよみがえらせ虫を冬ごもりから戻らせる。絵に描いて留め後世の人に見せよう。松は珍しく梅は古く竹は潇洒であり、経（亨頤）の酒と陳（樹人）の詩、廖（夫人）の泣き声。山河を彩る一本の筆が、無聊にしてこの時の情を写す。）」<sup>35</sup>と綴られている。

同年11月、何香凝は上海を出発し、香港からフィリピン、シンガポール、マレーシアを経由し、パリに到着した。東南アジアでは華僑に仲愷農工学校への支援を求め寄付を募る一方、旅費を捻出するため「書画会」を開催して自作の絵画を売り、旅費だけでなく、二、三年分の生活費を得ることになった<sup>36</sup>。パリには当初娘の廖夢醒が留学していたが、まもなく彼女は共産党員の李少石と結婚して帰国する。一方、1928年に共産党に入党した息子の廖承

志は、当時労働者運動の指導のためコミンテルンからドイツに派遣されており、反帝国主義運動に参加した容疑によりハンブルグで投獄されていた<sup>37</sup>。何香凝はイギリスにいる親類やドイツに滞在していた宋慶齡を訪ねた後、パリに居を定め、パリ大学で学んでいた官費留学生の劉天素や、リヨン大学の留学生であった李潔民らと同居を始めた。パリでの生活はごく質素なもので、何香凝は住居内に小さなアトリエを設け、一日中画作をして過ごし、時には劉天素らとパリの名所旧跡やヴェルサイユ宮殿を参観し、パリ郊外に出かけた。オペラを観劇したこともあったという<sup>38</sup>。これらの経験は、彼女の作画に大きな刺激を与えたことが推察される。翌1930年の夏には、釈放された息子の廖承志と共にドイツのベルリンを訪れ、かつて国民党婦女部で何香凝のもとで働いていたドイツ留学生の胡蘭畦のもとに同宿した。ベルリンではしばしば宋慶齡と交流しながら作画に努め、時には廖承志と合作することもあった<sup>39</sup>。半年後、母子はフランスに戻ったが、住居が手狭になりアトリエを設けることができなかったため、何香凝は作画を一時中断し、フランス語の学習に専念した<sup>40</sup>。パリ、ベルリンで過ごした期間は二年にも満たなかったが、何香凝にとっては絵を売ることによって生計を立て、質素な暮らしながらも作画に没頭でき、画家としてもっとも充実した時期であったのではないだろうか。パリで描いたとされる『松菊』（図1）は、遠近法も光の明暗の手法



図1 『松菊』（1931年、『何香凝詩画集』人民美術出版社、1963年より）

も用いられてはいないが、造形や構図、色彩に西洋画の影響が感じられる。また、絵全体が明るい印象につつまれており、制作当時の何香凝ののびやかな心情を感じさせる。しかし、まもなく国家の情勢は急変し、何香凝の画家としての静かな生活は終わりを告げることとなった。

1931年9月18日、満州事変（九・一八事変）が勃発した。蒋介石ら国民党は「安内攘外」を主張し、共産党との内戦を続けて国内の安定を優先し、日本との全面対決を回避する政策をとった。満州事変の報を受けた何香凝は国家の危機を座視することはできず、10月3日にパリで声明を発表して「急ぎ帰国し死傷者の救護活動にあたる」と述べ、抗日運動に参加するべく帰国の途についた<sup>41</sup>。帰国途中上海の友人に宛てた手紙には、「個人の責任を尽くす」ため、帰国後は救護隊を組織して反日救護活動に従事するが、その経費獲得のため書画展覧会の開催を企画していることが示され、書画の収集面での協力が求められていた<sup>42</sup>。

11月28日に上海に到着した何香凝は翌日記者会見を開き、「この度の国家の大患を目前にして悼み悲しみ、国民の身分で傷兵救護などの抗日活動を行うが、国内の政治には参加しない」と述べ、国民党中央および国民政府とは一線を画し、一国民として民衆と共に抗日活動に従事する意志を示した。また、1週間から10日以内に書画展覧会を開いて募金活動を行い、その後は上海で「紅十字会」（赤十字）の救護活動を行う予定であると表明した<sup>43</sup>。また、12月1日に行われた新聞の取材では、東北における日本の侵略は日増しに激しくなっており、中国の4億の同胞すべてに「救国」の責任があると民衆に呼びかけた<sup>44</sup>。何香凝は1921年7月に宋慶齡が広州で「女界出征軍人慰労会」を組織した際、みずからの絵を売って寄付を募る「義売」（慈善販売会）を行ったことがあり<sup>45</sup>、パリに赴く途中にも「書画会」を催して旅費と生活費を得た経験から、画家の立場で取り急ぎ行える有効な活動として、書画展覧会の開催を発案したのであろう。

12月6日の午後、何香凝の呼びかけにより「抗日書画会」の第一回準備会議が開かれ、鄭洪年、蔡子民（蔡元培）、葉恭綽、柳亜子、劉海粟、李秋君、賀天健をはじめ数十人の協力者が集まった<sup>46</sup>。12日には書画会の準備状況に関する続報が新聞に報じられ、何香凝が反帝国主義と中国の自由・平等のた

め犠牲となった「国民党と国家の先哲」、廖仲愷の夫人であることを紹介し、彼女は夫の遺志を継承し果敢に奮闘する「中国婦女界の傑出した人材」であり、「その芸術的精神は早くから名声を博す」と評した<sup>47</sup>。19日に開かれた第二回準備会議の様子も新聞に詳しく掲載され、何香凝の呼びかけに上海のみならず、北平（北京）や広州、南京などの書家・画家も応え、1500件あまりの書画が集まったこと、何香凝や陳銘枢、柳亜子、葉恭綽らが予約購入した絵画の販売価格がすでに17750元に達していることが報じられた<sup>48</sup>。この慈善販売会が開催前からいかに世間の注目を集めていたかが伺える。また、12月19日から数日にわたり、上海の各新聞紙面に何香凝の名前を掲げた「何香凝主催・救済国難書画展覧会」の告示広告が掲載された<sup>49</sup>。「救済国難書画展覧会」は12月28日から西藏路寧波同郷会で開催され、会場では毎日午後から何香凝や柳亜子、賀天健、劉海粟、張紅薇、李秋君らが揮毫し書画を合作することになった<sup>50</sup>。入場料は徴収せず、甲、乙、丙、それぞれ30元、2元、1元の三種類の展覧抽選券を販売し、30元券の景品には何香凝をはじめ有名な画家、書家の作品が準備され、2元券、1元券の景品にも何香凝らの書画作品や画集、書籍などが準備されていた<sup>51</sup>。12月29日付けの『申報』では、何香凝が今回の展覧会の準備において主導的役割を果たしたことが紹介され、展覧会開幕日の盛況ぶりが報じられた。また、「北蘇州路199号振元紗号」に住む陳光裕という人物が1元券1枚で有正書局から刊行された定価20元の『美術特刊』1部を引き当て、「北浙江路18号」に住む羅希三が1元券1枚を購入し、何香凝の絵画1枚を引き当てたことなども紹介された<sup>52</sup>。当初、展覧会は31日までの四日間を予定していたが、反響が非常に大きく、多くの参加者がつめかけたため三日間延長し、1月3日まで開催されることとなった<sup>53</sup>。この展覧会には書家や画家だけでなく、著名な政治家など各界の名士も書画作品を寄付したが、香港やシンガポールで活躍していた華僑の実業家胡文虎は、救護活動に役立ててほしいと飛行機2機を寄付した<sup>54</sup>。

抗日のための「義売」（慈善販売会）はこれ以降各地で開催されることになるが、満州事変後これほど速やかにかつ大規模に開催されたのはこの「救済国難書画展覧会」が初めてであり、予想以上の成功をおさめ、社会に大きな影響を与えた。この展覧会の準備委員会に参加した女性画家の李秋君は、

後に、当時上海ではいくつかの大きな書画活動が行われたが、すべて何香凝の統率を仰いでおり、彼女には厚い信望があったと述べている<sup>55</sup>。李秋君の言葉通り、展覧会の成功は何香凝の名声と人望、そして女性運動の中で培われたその指導力に負うところが大きかったと言えるだろう。1月22日の『時事新報』にはこの展覧会を総括する記事「何香凝救国画展結束、収款捐助抗日救国活動」が掲載され、今回の収益金の3分の1は抗日各団体の医薬品費と反日ストライキを行う労働者の援助のために用い、その残りを当初の予定通り、上海に婦女救護班を設立して抗日救護活動を行うための赤十字活動に用いると何香凝が提議したことを報じた<sup>56</sup>。一方、何香凝は蒋介石、孫科ら国民党中央と上海市長の呉鉄城に宛てて書簡を送り、「香凝個人の力には限界がある」として、民衆による抗日愛国運動への援助を求めた<sup>57</sup>。しかし、蒋介石は日本に対する妥協策を維持し、共産党への包圍攻撃を続けながら、日本軍との全面対決を回避した。1932年1月28日、第一次上海事変が勃発し、上海に駐屯していた蔡廷鍔率いる十九路軍は、上海の民衆の支援を受けながら、日本軍と対峙し激しく抗戦した。何香凝は翌29日、医師や看護師、慈善団体の責任者を自宅に招集し、即座に兵士の慰問と救護活動の準備を始め、30日には宋慶齡と共にみずから十九路軍を慰問した。そして救護活動の資金を調達するための募金活動や、傷兵を収容するための国難救護傷兵病院の設立<sup>58</sup>など後方支援活動を行いながら、十九路軍の陳銘枢、蔣光鼎両将軍と共に南京に向かい、再び蒋介石に兵士の救済を訴えた。しかし、やはり何の結果も得ることはできず<sup>59</sup>、蔣ら国民政府に対する失望をますます深めていった。

1932年6月、何香凝は柳亜子、経亨頤、陳樹人らと再び「寒之友社」を結成した。1920年代後半に結成した際は蒋介石と対立する立場を同じくしながらも、詩画を合作し芸術を愛好する集いとしての意味合いが比較的強かったが、この再結成には、「安内攘外」政策を維持し、日本に対し不抵抗主義をとり続ける蒋介石に対する強い抗議の念と、抗日愛国運動に邁進していこうとする固い決意を示す意図があったと考えられる。その後、「寒之友社」の参加者はしだいに増加し、劉海粟、黃賓虹、潘天寿、張大千、張善胡、豐子愷ら多くの画家や詩人が参加して、それぞれが厳しい冬の寒さに耐える松や



図2 『松、梅、竹』（1936年、『何香凝詩画集』人民美術出版社、1963年より）

梅、水仙、菊、蘭、楓などの植物を画題とする絵画活動を行った。特に何香凝と経亨頤、陳樹人の3人は、「歳寒三友」を題材とした絵を好んで描き、たびたび合作をした。1936年の合作作品『松・梅・竹』（図2）では、経亨頤が松を、何香凝が梅を、陳樹人が竹を描いたことが本人たちの筆により示されている。

当時、上海には中国画会、中国美術連盟、中国美術会など多くの美術団体が存在したが、女性の画家はまださほど多くはなかった。1934年4月、上海の女性画家は馮文鳳、李秋君、陳小翠、顧青瑤らの呼びかけのもとに結集し、中国女子書画会を設立した。何香凝もこの会に参加し、1935年から三年連続で開かれた第二期から第四期の女子書画会書画展に続けて出品した<sup>60</sup>。女子書画会は一、二年に一度の割合で比較的大規模な書画展を開いたが、その他にもしばしば、数名の会員による小規模の展覧会や個展、「扇面展」を開くなど積極的な活動を続け、大きな反響を得た。「扇面展」とは、会員数名で合作した詩や絵画を描いた扇を展示するものであったが、いずれの展覧会で

も、非売品以外の絵画や扇が廉価で売られ、会員がみずから編集したパンフレットも1冊1元ほどの価格で販売されたという<sup>61</sup>。また、女子書画会は中国画会と共同で1937年10月に「慰勞將士書画展覽會」を開催し、半月ほどの期間中に、何香凝、于右任、柳亜子、王一亭らの書画作品700点以上を展示販売し、7000元以上の収益をあげた<sup>62</sup>。一方、1936年8月に、陳樹人、胡藻斌、王一亭、徐悲鴻、黃賓虹らさまざまな分野の画家が結集し、「中華の救済と強化」を趣旨とする中国書画団体、力社が設立された。「力社」の名称には国民を喚起し、その団結をもって「力」とするという意味がこめられており、その趣旨に賛同して参加する者は多く、何香凝を初め会員は130余名に及んだ。組織の設立と共に上海の南京路大新公司（現在の上海市第一百貨商店）の4階展示ホールで「力社書画展覽」が開催され、16日間にわたり、会員の作品数百点が展示された。その大規模かつ広範な展示には各方面の注目が集まり、会期中はフランスやイギリス、アメリカ、ソ連の美術家も参観に訪れ、展覽会の開催と同時に『力社画集』も出版された<sup>63</sup>。その後、1937年7月に日中全面戦争が始まり、日本軍の上海進攻により上海は11月に陥落し、多くの書家や画家が上海を離れた。力社はやがて活動停止に陥ったが、女子書画会は引き続き租界内にあった大新公司4階展示ホールなどで断続的ながらも展覽会を開催し続け、1947年5月2日の第13回展覽会をもって活動を休止した<sup>64</sup>。

このように上海では1930年代半ばまでにさまざまな美術団体が生まれ、展覽会の開催や画集の出版などの活動が活発に行われていた。展覽会の収益金は、一部は芸術活動を維持するための資金となったが、多くは抗戦中の兵士の慰問や救護活動、日本軍の攻撃により被災した人々の救済などの抗日救国活動にあてられた。何香凝は一国民の立場で活動することにこだわり、国民政府や国民党、共産党など政党の活動とは距離を置き、画家であることを立脚点として「書画展覽会」の形で抗日活動を推進した。また、「書画展覽会」は慈善販売会、すなわち抗日のため戦う兵士の慰問と救護のための募金活動という役割を持っていただけでなく、展覽会の開催自体に一般大衆に対し国家の危機を訴え、抗日と救国のため立ち上がるよう世論を喚起する役割があった。彼女が関わった書画会の設立や数々の展覽会の開催には多くの書家



や画家、詩人が呼応し、上海における芸術活動を振興させる結果にもつながったが、芸術家たちが国家の危機に直面して結集し、自分たちに最も身近な方法で抗日救国活動を進め、世論に訴え、一般大衆を喚起しようとしたことは注目に値する。また、日本の侵略が拡大し、国共両党の対立が深刻化する情勢の中で、芸術家がみずからの芸術活動にのみ没頭することは困難であったことが推察される。その後、日中戦争が長期化する中で、画家たちの中にはより直接的な方法で抗日を示す者も現れることになった。

#### 4. 抗日民衆運動の発展と政治への復帰

1930年代、何香凝は画家としての活動のほか、宋慶齡が中心となって進めていた救護活動や社会活動にも積極的に参加していた。宋慶齡は1932年12月17日に蔡元培、楊杏仏らと共に上海で「中国民権保障同盟」を結成した。この同盟には作家の魯迅らも参加しており、国民党の白色テロを批判し、結社、集会、言論、出版の自由など人民の権利を獲得し、政治犯の釈放を求め援助することを趣旨としていた。宋慶齡はこの同盟は「政党」ではなく、その目的も「中国の人民大衆の政治・経済闘争を指導することではない」ことを強調していた<sup>65</sup>。何香凝は心臓病再発のためこの同盟に参加はしなかったが、その趣旨に同調し、翌年3月に政治犯釈放を訴える独自の声明を発表した。何香凝も宋慶齡と同じく、「私の建議は正道に基づくもので、党派を超えた革命の立場にあり、いささかの政治的役割も持たない」ことを強調し、みずからの使命は孫文と夫廖仲愷の遺志を継承して「帝国主義を打倒し、中国と世界の人々を苦しみから解放し、三民主義の民生主義の社会を実現する」ことにあるとしていた<sup>66</sup>。孫文夫人、廖仲愷夫人としての彼女らの言動は依然として影響力が大きく、その動向は蔣介石ら国民党中央だけでなく、共産党や世論からも注視されており、それゆえ彼女らはあくまで政治と隔たりを置いた中立の立場で社会活動や抗日活動を行おうとしていたことが伺える。

1935年8月1日、共産党中央と中華ソビエト共和国中央政府は「八・一宣言（抗日救国のために全同胞に告げる書）」を発表し、全国の人民や各党派・団体に対し「内戦停止、一致抗日」と「抗日民族統一戦線」の結成を呼びかけた<sup>67</sup>。この宣言は北平や上海など大都市の世論に影響を与え、抗日の気運

は一気に高まった。「満州国」を樹立して東北地方を支配下に置いた日本軍は、さらに華北の資源と市場の掌握を図る華北分離工作に着手し、これに抗議する北平の学生数千人が12月9日、華北の分離反対、内戦停止、言論・集会の自由を要求しデモを行った。この一二・九運動は全国に波及して各都市で愛国学生運動が起こり、抗日民衆運動はますます勢いを増した。上海では上海文化界救国会の結成を皮切りに各界の救国会が次々に成立し、翌1936年には組織の結集が図られ、1月28日に上海各界救国連合会が、5月末には全国各界救国連合会（以下、救国会と略称）が成立した。

救国会は全国の各党派に対し、軍事衝突の停止、政治犯の釈放、共同抗戦綱領の制定、統一的抗戦政権の樹立を呼びかけ<sup>68</sup>、救国会の執行委員に選出された何香凝と宋慶齡は、国民党の共産党攻撃と抗日運動弾圧を非難し、国民に「一致抗日」を呼びかけた。救国会成立後その機関誌となった『救亡情報』の創刊号には、何香凝のインタビュー記事が掲載されている。その中で何香凝は、みずからは「政治に対する理解が浅く、革命の先達になどあたらない」が、民族の危機がこのような局面に至った今、「亡国前夜の国民」はみな国事を切実に慮る必要があり、「中国国民の身分」でインタビューに答えると述べ、国民には「みずからの国家を愛する権利と義務」があるとして、「国家の危機に直面し救国のため立ち上がるべき」だと民衆を喚起した。また、記事には何香凝の揮毫した書「求我民族生存必須打倒帝国主義（我が民族の生存を求めるには必ずや帝国主義を打倒しなければならない）」も添えられていた<sup>69</sup>。同年9月18日、九・一八事変5周年を記念して記念碑の定礎式典が行われたが、警察による弾圧で多くの負傷者を出す惨事となり、何香凝と宋慶齡は即座に連名で声明を発表しこれに抗議した。その後、毛沢東は宋慶齡に書信を送って「革命救国の言論行動」に敬意を払い<sup>70</sup>、これを機に宋慶齡と何香凝に対し、抗日戦線への参加と「真の民主共和国」建国のため協力を要請したいと考えるようになった<sup>71</sup>。

一方、国民党は救国会を「非合法団体」、「反動分子の集団」と決めつけ、11月23日には沈鈞儒、章乃器ら救国会の責任者7人を逮捕するに至った（「抗日七君子事件」）。宋慶齡は「上海各会救国執行委員」の名義で抗議の声明を発表したが、救国会は「共産党のシンパ」でも政府に反対するものでもなく、

「政治信条と党派を分かたず、統一戦線を成立させ、民族解放戦争に従事する」立場にあることを強調した<sup>72</sup>。また、救国会は『救亡情報』に宋慶齡、何香凝、馬相伯の署名付きの宣言を発表し、この事件は救国会に対する不当な迫害であり「民衆」を弾圧するものだとして抗議し、沈鈞儒らの釈放を要求した。この「宣言」でも、「唯一の敵」は「日本帝国主義」であり、救国会の立場は政府に反対するものでも共産党を擁護するものでもないことが強調されており、「もし共産党が共に抗日するという綱領を実行できず、内戦をしようとするのであれば、断固として共産党に反対する」ことが明言されていた<sup>73</sup>。すなわち宋慶齡と何香凝は、共産党との関係を否定し、あくまで中立的な立場にあることを主張しながら、国民党に対し抗日民族統一戦線への参加を呼びかけたのである。彼女らが殊更に「共産党擁護」を否定していたのは、孫文夫人・廖仲愷夫人としての立場が依然として国民党内で影響力を持つことを自認し、その影響力をもって蒋介石らに働きかけ、「一致抗日」を実現したいと考えていたからであろう。一方、11月8日の『救亡情報』の紙面には、何香凝と陳樹人が「国難書画展覧会」を開催し募金活動を行うことが告示されており、何香凝が救国会の運営にあたり依然として「義売」の活動を積極的に行っていたことが伺える<sup>74</sup>。

その後、1937年7月7日の盧溝橋事件を機に日中両国は全面戦争に突入し、9月末にようやく第二次国共合作を中心とする抗日民族統一戦線が成立した。何香凝は上海陥落後、息子廖承志の妻となった経亨頤の娘、経普椿を連れて香港に逃亡した。香港では宋慶齡が組織した「中国保衛同盟」の活動を支持し、女性を組織して抗日救護運動を続けたが、1941年12月に香港が陥落すると、柳亜子や経普椿ら母子と広東、桂林を転々としながら逃亡生活を送った。逃亡生活の中で彼女は再び絵筆を取り、絵を売って生計を支えた。娘の廖夢醒が売画の代金を受け取ることもあり、何香凝はしばしば廖夢醒に手紙でその代金の使途や送り先について指示を出している<sup>75</sup>。桂林に逃れていた頃、蒋介石が人を介して百萬元の小切手と、重慶に移住するよう要請する手紙を何香凝に送ったことがあったが、何香凝はその封筒に「閑来写画营生活、不使人间造孽钱（絵を描くことで生活を営んでおり、俗世間の不正なお金は使わない）」という言葉を書き添えてそのまま送り返した<sup>76</sup>。また、逃亡先

でも彼女は書画会や街頭献金、募金デモなどの活動に積極的に参加した<sup>77</sup>。書画会による「義売」以外にも、何香凝が募金などへの謝礼として絵画を贈ることも多かったが、逃亡生活の中で絵筆や顔料を失っており、適当な筆で手に入った紙に描くしかなく<sup>78</sup>、短期間で仕上げるため、花を題材とする簡素な絵を描くことが多かった。

宋慶齡と何香凝は長らく政党によらない中立の立場をとっていたが、日中戦争終結後、国共両党が全面内戦に突入する局面に至り、蔣介石に対し孫文夫人、廖仲愷夫人としての影響力を行使することをついに放棄し、共産党からの呼びかけに応じ、人民民主統一戦線に参加することを選択した。1940年代後半には、反蔣介石の立場に立つ旧国民党員が結集して民主諸党派を設立する動きが生じ、何香凝はその中核となって中国国民党民主促進会や中国国民党革命委員会（以下、民革と略称）の設立に携わり、再び政治の第一線で活動することとなった。

## 結び

何香凝の娘廖夢醒は、何香凝が国民党の職を離れ1929年に出国して以降、「国民党から一銭のお金も受け取ることはなく、絵を売ることでは生計を立てて暮らし」、「画家として清廉で簡素な生活を送った」と述べている<sup>79</sup>。また、何香凝の絵画は国民党左派だけでなく、廖仲愷の教え子や、黄埔軍官学校を卒業した国民党の軍人、官僚からも欲され、海外華僑は帰国や観光の際に友人に代金を託して何香凝の絵画を購入し、住所を残して後から郵送させたという<sup>80</sup>。何香凝の絵画は抗日運動や救護活動などに資するため、「書画会」などの「義売」の場に出品されることが多く、それ以外にも献金や募金に対する謝礼や、彼女自身への支援に対する謝礼として贈られることも多かったため、小品ながらも多くの作品が生み出された。戦時中の逃亡生活の中で散失した絵画も多く、彼女の絵がどれほどの価格で売買され、どのような人物が購入したのかなど、その芸術活動にはまだまだ不明な点も多い。しかし、たとえば「国難書画展覧会」のような慈善販売会で彼女の書画を買った人物の中には、彼女の立場を支持し、その主張に賛同する意志を積極的に表明するため購入した者もいただろう。すなわち、そこに描かれている画題そのも

のよりも、むしろ絵画を通して作者の主義主張が伝わることにこそ意味があったのではないだろうか。

前述のように1920年代末から40年代半ばに至るまで、何香凝は政治とは一線を画し、画家であることを立脚点として絵画の「義売」や兵士の救護活動など独自の活動を行った。彼女は「一国民」の資格で活動を行うことを主張し、宋慶齡と共に行った社会運動や抗日救国運動の中でも、それが国民党とも共産党とも距離を置いた在野の立場での活動であることを繰り返し強調していた。しかし、これらの活動は彼女が「民国十三年（1924年）の改組の精神」と称した、1924年の国民党改組時に孫文と廖仲愷が目指した政治的理念に基づくものであり、多くの人々の支持を受け、彼女は以前にも増して名声と人望を得るようになった。そして1940年代後半には反蔣介石の立場に立つ旧国民党員を結集した組織の設立に中心的立場で携わり、結果的に民主諸党派の指導者として政治の第一線に復帰することになったのである。このような経緯から、彼女の絵画作品や芸術活動全体が政治活動と密接に結びつけて論じられるようになったのではないだろうか。

中華人民共和国建国後、何香凝は民革の代表として政府に参加し、その後、中央人民政府委員、政務院華僑事務委员会主任、人民政治協商会議全国委員会副主任、全国人民代表大会常務委員会副委員などの要職を歴任し、1960年には中国美術家協会主席に就任した。晩年は、画作に多くの時間を割き、息子の廖承志や友人と合作することも多く、美術を通じた交流を続けた。また1961年には、中国共産党の建党40周年を記念して、『萬古長青』と題した松の絵を描いている（図3）<sup>81</sup>。建国当初、何香凝の存命中に出版された『何香凝画集』（人民美術出版社、1954年）の序文の中で、政治家であり著名な文学者でもあった郭沫若は、「革命とは高度の芸術であり、先生（何香凝）の革命事業と芸術活動は二が合して一となった（二者が融合することで発展した）が、これは偶然ではない。」と評しており<sup>82</sup>、このような評価が現在に至るまで主流となっている。

その他、画家何香凝について特筆すべきことは、冒頭で述べたように、1997年4月18日に彼女の名を冠した「何香凝美術館」が深圳に建設されたことである（図4）。この美術館は1995年5月に政府の承認を受け、深圳市華



図3 『萬古長青』（1961年、『何香凝詩画集』人民美術出版社、1963年より）



図4 「何香凝美術館」（筆者撮影）

僑城の一角に建設された国家レベルの美術館である。館名には当時の国家主席であり共産党中央総書記であった江沢民の揮毫が用いられ、何香凝の美術作品300数点が展示された。深圳市は、香港返還前は中国本土と香港を結ぶ鉄道による出入国の中継地に過ぎなかったが、鄧小平の改革開放路線により1980年に経済特区が設けられ、華僑資本や外資が導入されて急速に発展した。何香凝は夫廖仲愷がアメリカ華僑であり、辛亥革命期から夫とともに海外華僑に対し革命への支持の呼びかけと募金活動を行ったことから、華僑と深い縁のある人物と見なされており、建国後は政務院華僑事務委員会主任に就任し、息子の廖承志が副主任を務めて彼女を補佐した<sup>83</sup>。いわば何香凝は、海外華僑と母国を結ぶ架け橋となり、華僑に愛国心を訴えかけ、国家への貢献を募るための象徴的存在であった。開館式典では当時の國務院副総理であった錢其琛がテープカットを行い、全国人民代表大会常務委員会副委員長の費孝通、全国政治協商會議副主席の馬万祺、民革中央主席の何魯麗や、廖承志の妻経普椿と長男廖暉ら何香凝の家族も列席した<sup>84</sup>。また、翌1998年6月27日には何香凝の生誕120周年を記念して、何香凝の絵画作品『虎』（1910年作）、『獅』（1914年作）、『梅』（1943年作）の三種の「何香凝国画作品」記念切手が発売され、何香凝美術館と広東省集郵公司、深圳市集郵公司により作成された切手帳『「何香凝国画作品」專題郵冊』も同時発売された（図5、6）。

こうして何香凝の絵画は近年、改めて政治的な意味づけをされ、現在も新たな役割を負い続けている。孫文の遺志の後継者をみずからの使命と自認していた何香凝は、中華人民共和国が孫文の革命の伝統を受け継ぐという革命の正統性や、共産党と民主諸党派の協力関係、華僑と祖国の友好関係などを表す象徴的存在であり、彼女の絵画作品は彼女の亡き後、それを改めて示すための「記号」としての役割を担っているのである。冒頭に述べた2011年9月に北京で開催された「辛亥革命100周年記念—何香凝芸術精品展」はその一例であろう。そのほかにも、2009年8月には台北市の国父記念館において、何香凝美術館と国父記念館の共同主催による「何香凝芸術精品展」が開催され、何香凝の絵画作品38点と写真10点が展示された。国父記念館とは、孫文の生誕100年を記念して1972年に台北市東部に建てられた建築物である。何香凝は孫文と縁が深い人物であり、国民党の前身である中国同盟会設立当初



図5 何香凝の絵画作品切手（『何香凝国画作品』專題郵冊』より）



図6 何香凝の絵画作品と肖像写真（『何香凝国画作品』專題郵冊』より）



からの「老党员」であったが、かつて台湾にとっては共産党側に転じた「裏切り者」とも言える人物であった。しかし、2008年に民進党から政権を取り戻し総統に就任した国民党の馬英九は、経済を中心に中国との関係強化を目指し、対中融和を進めている。「何香凝芸術精品展」は国民党側の政策転換と、中台間の関係改善を顕著に示すものであったと言えるだろう。この展覧会の開催にあたり、何香凝美術館の館長であり華僑城集団の総裁でもある任克雷は、同年8月に台風による大きな被害を受けた台湾南部の被災地域の再建のため、華僑城集団の名義で1000万台湾ドルを寄付することを発表した<sup>85</sup>。一方、翌2010年11月には、何香凝の母校である日本の女子美術大学の創立110周年記念イベントの一環として、「何香凝芸術名作展—私立女子美術学校卒業100周年」が企画された。しかし、この展覧会は何香凝美術館側の申し出により延期となり、いまだ実現はしていない。延期の理由は明らかにされていないが、当時、尖閣諸島における中国漁船と海上保安庁巡視船の衝突事件に端を発し、双方の国内では各地で抗議活動が行われ、日中関係は冷え込んでおり、この企画がそのあおりを受けたことは想像に難くない。

何香凝の政治面と芸術面の活動は常に並行したものであり、それを完全に分断して評価することは難しい。しかも何香凝の絵画は彼女の没後、新たな象徴性と政治性を帯び、現在に至っている。今後は、何香凝の芸術活動や絵画作品に対し、より多面的かつ重層的な評価と検討が行われることを期待したい。

## 注

- 1 筆者はこれまで、国民革命期や中華人民共和国建国前後の時期を中心に、何香凝の活動や思想の変遷を考察し、その成果を博士学位論文「中国国民党革命委員会の研究—何香凝の活動と思想的変遷を通じて—」（神戸大学大学院、2002年）を初め、「国民革命と何香凝」（『国際文化学』第2号、2000年）、「中国国民党革命委員会の結成と人民政治協商会議—何香凝とその役割—」（『現代中国』第75号、2001年）、「何香凝一家と政治に生きた女性指導者」（関西中国女性史研究会編『ジェンダーからみた中国の家と女』東方書店、2004年）として発表してきた。そのほ

- か日本における何香凝研究には、阿久根麻里子「何香凝—日本とのかかわり」(『文化学研究』17号、2008年)があるが、それ以外は何香凝の著作や生涯を簡単に紹介するものがいくつか見られる程度である。
- 2 尚明軒・余炎光編『双清文集』下巻、人民出版社、1985年。なお、上巻は彼女の夫廖仲愷の文集である。
  - 3 何香凝の伝記には、周興梁『廖仲愷と何香凝』(河南人民出版社、1989年)、唐瑛絹・劉士璋・安山『宋慶齡と何香凝』(中国和平出版社、1991年)、李永・温楽群・汪雲生『何香凝伝』(中国華僑出版公司、1993年)、尚明軒『何香凝伝』(北京出版社、1994年。なお、本書は2004年に民族出版社から増訂版が出版されている)、余德富『双清伝略—廖仲愷と何香凝愛国革命的一生』(広東人民出版社、1998年)、呉琴『鄧穎超と何香凝』(華文出版社、1999年)、蒙光励『廖家兩代人』(暨南大学出版会、2001年)などがある。
  - 4 王曉松「何香凝の芸術家人生」(女子美術大学歴史資料室編『女子美術教育と日本の近代—女子美110年の人物史』学校法人女子美術大学、2010年、pp.299-320)。
  - 5 本書は河北教育出版社から「中国名画家全集」の中の一冊として出版されている。
  - 6 このシンポジウムにおける研究成果は、翌年に出版された楽正維主編『反思二十世紀中国：文化与芸術—紀念何香凝誕辰一百三十周年國際學術研討會文集』(嶺南美術出版社、2009年)に収められている。
  - 7 楽正雅「何香凝 (1878 - 1972)」(朱伯雄・曹成章主編『中国書画名家精品大典』浙江教育出版社、1997年、p.1201)。
  - 8 鄧穎超「中国革命先駆、傑出的女革命家何香凝」(『人民日報』1982年8月23日)。
  - 9 周興梁「作為絵画芸術大師の何香凝—試論何香凝の美術生涯」(任克雷主編『何香凝美術館年鑑2003 - 2006』2007年、p.125)
  - 10 李松「走近何香凝—何香凝与当代中国美術」(前掲『反思二十世紀中国：文化与芸術—紀念何香凝誕辰一百三十周年國際學術研討會文集』p. 5)。
  - 11 纏足は漢民族の風習であったため、一般に客家の女性は纏足をしていなかった。また、廖仲愷の父はサンフランシスコに移住後、中国女性の纏足を悪弊であると恥じ、息子に纏足をしていない妻を娶るよう言い残したという。
  - 12 尚明軒『何香凝伝』北京出版社、1994年、pp.17-18。周興梁『廖仲愷と何香凝』河南人民出版社、1989年、p.15。
  - 13 陳此生「革命母親何香凝先生」(『回憶与懷念—紀念革命老人何香凝逝世十周年』北京出版社、1982年、p.141)、前掲『何香凝伝』p.17。
  - 14 何香凝「自伝初稿」(前掲『双清文集』下巻、p.192)。
  - 15 中国国民党中央委員会党史委員会『革命文献』第2輯、中央文物供应社、p.55。
  - 16 鶴田武良「『女子美術学校』と清末・民国初期の女子美術教育」(女子美術大学発行『アジアの華Ⅱ—美の環流』2004年1月、p.9)
  - 17 廖承志「我的母親和她的画—為何香凝中国画遺作展覽而作」(『人民日報』1979

- 年2月14日)。
- 18 何香凝「我的回憶」(前掲『双清文集』下卷、p.915)。
  - 19 同上。
  - 20 同上。
  - 21 島村輝「何香凝の留学生時代とその後」(前掲『アジアの華Ⅱ—美の環流』p.11)。なお、女子美術大学には今も何香凝の成績表が保存されており、筆者は2007年に女子美術大学を訪問した際、この貴重な資料を閲覧する機会を得た。ここに記して感謝したい。
  - 22 吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究—東京美術学校留学生史料—』ゆまに出版、2009年、p.136。
  - 23 前掲「走近何香凝—何香凝与当代中国美術」(前掲『反思二十世紀中国：文化与芸術—紀念何香凝誕辰一百三十周年國際學術研討會文集』p.3)。
  - 24 前掲「何香凝の芸術家人生」(女子美術大学歴史資料室編『女子美術教育と日本の近代—女子美110年の人物史』学校法人女子美術大学、2010年、p.305)。
  - 25 前掲「我的母親和她的画—為何香凝中国遺作展覽而作」。
  - 26 前掲「作為絵画芸術大師の何香凝—試論何香凝の美術生涯」(『何香凝美術館年鑑2003—2006』p.125)、前掲「我的母親和她的画—為何香凝中国遺作展覽而作」など。
  - 27 「眠れる獅子」の言説・イメージについては、石川禎浩「眠れる獅子(睡獅)と梁啓超」(『東方学報(京都)』第85冊、2010年、pp.479-509)を参照されたい。
  - 28 「与何香凝の談話」1925年3月11日(『孫中山全集』第11集、p.638)。
  - 29 鶴田武良「嶺南三家—高劍父・高奇峰・陳樹人 新国画運動の先駆者たち」(『季刊水墨画』24号、1983年、pp.50-51)。
  - 30 前掲「我的母親和她的画—為何香凝中国遺作展覽而作」。
  - 31 何香凝「蒋介石是反革命派—在国民党湖北省党部、漢口特別市党部的演說」1927年4月13日(前掲『双清文集』下卷、p.64)。
  - 32 「与汪精衛等討論蔣通電」1927年4月22日(前掲『双清文集』下卷、pp.72-73)。
  - 33 蒙光励「大革命時期的何香凝」(『廖仲愷何香凝研究—廖仲愷何香凝學術檢討會論文選』廣東高等教育出版社、1993年、pp.267-268)。
  - 34 「何香凝電中委会抗議」(『大公報』1928年11月14日)。
  - 35 『何香凝詩画集』人民美術出版社、1963年。
  - 36 前掲「我的母親和她的画—為何香凝中国遺作展覽而作」。
  - 37 劉天素「良師、慈母—回憶在何香凝先生身邊的日子」(同上『回憶与懷念—紀年革命老人何香凝逝世十周年』、p.183)。
  - 38 同上、pp.184-185。
  - 39 胡蘭畦「回憶何香凝先生」(同上『回憶与懷念—紀年革命老人何香凝逝世十周年』、pp.194-196)。

- 40 前掲「良師、慈母—回憶在何香凝先生身邊的日子」p.187。
- 41 前掲『何香凝伝』p.381、曹健民主編『中国民主党派の歴史和現状』中国人民大学出版社、1994年、p.21。
- 42 何香凝「致上海友人函」1931年11月19日（前掲『双清文集』下巻、p.113）。
- 43 「何香凝到滬後談話」（『申報』1931年11月30日）、何香凝「在上海与記者的談話」1931年11月29日（前掲『双清文集』下巻、p.114）。
- 44 何香凝「人人都有救国的責任—与国聞社記者的談話」1931年12月1日（同上『双清文集』下巻、p.115）。
- 45 前掲尚明軒『何香凝伝』p.79。
- 46 「何香凝發起抗日書画会」（『申報』1931年12月7日）。
- 47 「何香凝抗日之未雨綢繆」（『申報』1931年12月12日）。
- 48 「何香凝書画会之進行」（『申報』1931年12月20日）。
- 49 『申報』1931年12月21日、12月25日の第1面などに掲載されている。
- 50 「救済国難書画展消息」（『申報』1931年12月27日）。
- 51 「何香凝画展開幕」（『申報』1931年12月28日）。
- 52 「何香凝画展落幕」（『申報』1931年12月29日）。
- 53 『申報』1931年12月31日。
- 54 前掲「救済国難書画展消息」。
- 55 陳正卿「何香凝抗戰之前在上海的書画活動」2012年7月26日（中国国民党革命委員会 [http://www.mingge.gov.cn/txt/2012-07/26/content\\_5191615.htm](http://www.mingge.gov.cn/txt/2012-07/26/content_5191615.htm)）。
- 56 張長虹「留取丹青照汗青—何香凝与救済国難書画展覽会」（『榮宝齋』2007年2期、p.284）。
- 57 何香凝「致蒋介石等函」1932年1月24日（前掲『双清文集』下巻、p.124）。
- 58 前掲『中国民主党派の歴史和現状』p.23。
- 59 陳此生「革命母親何香凝先生」（前掲『回憶与懷念—紀年革命老人何香凝逝世十周年』、p.148）。
- 60 王韜「佩環簇簇尽仙才—論“中国女子書画会”」（『中国書画』2007年5期、p.56）、「女子書画会今日開幕」（『申報』1935年5月10日）、「中国女子書画会第三屆展覽会」（『申報』1936年5月29日）、王震編著『二十世紀上海美術年表』上海書画出版社、2005、p.427。
- 61 高琛「中国女子書画会对芸術市場の影響」（『新視覚芸術』2009年1月、p.96）。
- 62 前掲「佩環簇簇尽仙才—論“中国女子書画会”」p.53。
- 63 黃可「何香凝与上海書画团体“力社”」（『目擊圖像的力量—何香凝美術館在2002年』2002年、pp.326-327）。
- 64 前掲「佩環簇簇尽仙才—論“中国女子書画会”」p.54。
- 65 宋慶齡「中国民權保障同盟的任務」1932年12月（仁木ふみ子訳『宋慶齡選集』上、ドメス出版、1979年、p.100）。

- 66 何香凝「建議釈放全国政治犯—与日日社記者的談話」1933年3月18日（前掲『双清文集』下巻、pp.136-138）。
- 67 「中国蘇維埃政府、中国共産党中央為抗日救国告全体同胞書（八一宣言）」1935年8月1日（中央檔案館『中共中央文件選集』第10冊、中共中央党校出版社、1989年、pp.518-525）。
- 68 「全国救国連合会成立大会宣言」（『救亡情報』1936年6月14日）。
- 69 「救国領袖 何香凝訪問記」（『救亡情報』1936年5月6日）。『救亡情報』は5月6日に創刊されたが、同月31日から二日間にわたり開かれた救国会の成立大会において、救国会の機関誌とすることが定められた。
- 70 唐瑛絹・劉士璋・安山『宋慶齡与何香凝』中国和平出版社、1991年、p.60。
- 71 毛沢東は蔡元培に対して書簡を送って彼の抗日救国事業への賛同を称え、南京国民政府に対し、内戦停止と抗日作戦の実行、孫文の「革命的三民主義と三大政策の精神」の回復、「各党各派各界各軍による抗日救国代表大会と人民の選挙による全国国会の召集」および「真の民主共和国」の建設を主張するよう彼に要請し、宋慶齡と何香凝にも同じ趣旨の要請をしたい旨（「統此致訊」）を明らかにしていた。（『致蔡元培書』『毛沢東書信選集』人民出版社、1983年、pp.66-69）。
- 72 宋慶齡「為沈鈞儒等七人被捕声明」（前掲『宋慶齡選集』上、pp.156-157）。
- 73 「為七領袖被捕事件宣言」（『救亡情報』1936年12月18日）。
- 74 「何香凝發起組織国難書画展覽会」（『救亡情報』1936年11月8日）。
- 75 「致廖夢醒函」1944年6月27日、8月16日、9月21日、1945年5月21日、9月28日。（前掲『双清文集』下巻、pp.400-402、406-408、413）。
- 76 前掲「何香凝（1878 - 1972）」（『中国書画名家精品大典』第3巻、p.1203）。
- 77 李任仁「香凝老人在桂林二三事」（前掲『回憶与懷念—紀年革命老人何香凝逝世十周年』、p.170）。
- 78 前掲「我的母親和她的画—為何香凝中国画遺作展覽而作」。
- 79 廖夢醒「我的母親何香凝」（前掲『回憶与懷念—紀年革命老人何香凝逝世十周年』、p.104）。
- 80 同上。
- 81 島村輝「何香凝の留學生時代とその後」p.12。
- 82 郭沫若「序」（何香凝『何香凝画集』人民美術出版社、1954年）。
- 83 なお、1984年から1997年までは、廖承志の息子の廖暉が華僑事務委员会主任の職に就いている。
- 84 「何香凝美術館開館啓用—江沢民総書記題写館名 錢其琛副総理剪彩」（『美術』1997年7期、p.5）。
- 85 「何香凝芸術精品展台北開幕」（『華人世界』2009年10期、p.15）。

何香凝的艺术活动—在二十世纪三〇年代通过美术活动进行抗日救国运动的研究

何香凝不仅是中国近现代史上著名的女革命家、政治活动家，而且还是一位优秀的画家。她在日本留学期间就开始参与孙中山的革命事业，是从中国同盟会时期的老国民党员。一九二五年孙中山和她爱人廖仲恺逝世后，她的政治地位提高，历任了国民党的各种要职。但她反对蒋介石攻击共产党加强独裁的作法，一九二九年辞掉国民党的职位前往欧洲。她在巴黎、柏林以画画儿来维持生活，这段时期对画家何香凝来说是她过得最充实的一段时间。一九三一年，九一八事变发生后，她立即回国，以一个“国民资格”来从事抗日救国活动。她在上海召集书画家举办的“救济国难书画展览会”，受到各方面的关注。除了上海以外，全国各地的书画家也纷纷捐赠作品义卖，因参观者众多，延长了展期。何香凝主办的此次展览会规模极大、大有社会影响，获得了出乎意料的成功。何香凝将义卖所得用于创办国难妇女救护训练班，开展了抗日救护工作。此外，她通过书画展览会动员了全国各地的书画家、唤起了民众，使此次义卖会成为爱国人士奋起抗日的的一个起点。虽然她离开了国民党、离开了政治家的的工作，但她以画家、一个普通国民的身份来参与抗日救国运动。到了一九四〇年代后期，她又恢复参加政治活动，聚集反对蒋介石的国民党民主人士创办了中国国民党民主促进会、中国国民党革命委员会，接受共产党的领导，参加人民民主统一战线。

何香凝的艺术活动、绘画作品被视为与她的政治活动有着密切的联系。她逝世后，经国家批准，一九九七年在深圳华侨城内建了何香凝美术馆。一九九八年六月，为纪念她圣诞一百二十周年，出版了她的绘画作品《狮子》、《虎》、《梅》的邮票。此后，何香凝的绘画作品成为一个象征她和民主党派对共产党的协助、唤起华侨对国家贡献的带有标志性的记号。

The artistic practices of He Xiangning: an examination of her anti-Japanese movement through art in the 1930s

**Keywords:** He Xiangning, anti-Japanese movement, Chinese art in the 1930s